

漂う不安 競うマツチヨ

保守回帰

まともな内政ができていないときに、大衆の目をくらませる一番良い方法は、軍事的にマッチョになることだ。そうした人気稼ぎは、どの国でも政治家の常套手段といえる。

選択のために

乱流 総選挙

朝日新聞
12(H24)
11.29

精神科医

和田秀樹さん



景気が悪い時は国民も、自分たちは強いとか、正しいか思いたがる。「理想化された大

わだ・ひでき 国際医療福祉大学
大学院教授。教育・受験関係の著書
が多数ある。映画監督作品に「受験
のシンデレラ」。52歳。

将」を求める心理が働き、政策より、威勢の良さで判断することになりがちだ。

日本には、景気低迷の閉塞感に加え、震災や原発問題への不安もあり、国民にそういう傾向が強まっているのではないか。政治家、政党もその意識をくむかのように「マツチヨ」を争っている。

いま人が死んでもいない領土問題は、ものすごく声高に叫ばれている。一方で、誰にもみとられず亡くなる独居高齢者や、年3万人を突破した自殺者の問題は置き去りにされている。
1990年前後まで、勉強し

て、そこそこの会社に入れば豊かに暮らせるという「ジャパニーズドリーム」があった。「アメリカンドリーム」より、はるかに門戸が広がった。

しかし、この20年の構造不況で、若い世代には自分の努力で運命を切り開けるといって、主体的な感覚が希薄になってきている。なんとなく全体の雰囲気に乗ってしまう危険性を感じる。「強い日本の貧乏人だったらいいや」みたいな。

若い人には、だめな時にどう立て直すかというのが大事、と肝に銘じて選挙に臨んでほしい。
(聞き手・石田貴子)